

## おわりに

### 二〇〇〇年の歴史遊行の旅

洛陽（ルオヤン）。

いまでも現代都市として輝いている中国・中原の洛陽市には申し訳ないですが、若年のころからわたしが関心を寄せつづけたのは、歴史の底に輝く文明揺籃の地であり、周公旦が「土中」と呼んだ洛邑でした。そして何よりも二〇〇〇年ほど前の後漢時代に倭の奴国王の遣い（五七年）が、さらに三国時代の魏に女王卑弥呼の遣い（二三八、二四三年）がはるばると朝貢に訪れた都、「日中交流の原点」ともいふべき古都としての洛陽でした。

洛陽（洛邑）を訪れるという「二〇〇〇年遊行の旅」は、若い日からの志として、心の奥のあちこちに移動させながら持ちこたえてきました。「初志」というよりは夢の領域に近かったから、実際に果たすとなると外から呼び覚ましてくれる何か特別の力が必要でした。そんな衝撃的な力が何度かやってきて、契機はこれとあって明確ではありませんでしたが、いくつかの力に合わせ押されるようにして、古都洛陽へと出奔しました。

一九九四年の秋、定年を待たずに五五歳で、通い慣れた新聞社を自主退社して、遠い日の夢であった「二〇〇〇年遊行の旅」を果たすことになったのです。かつて日本からの遣使が足跡を残した古都を訪れて、この国と大陸との関わりの原点に立つことで、大陸とこの国の将来を見はるかす糧を得るといふ漠とした目標を課しての出奔でした。そんな唐突

な来訪者を温かく迎え入れてくれた洛陽外国語学院での外籍専門家（客員教授）として長期滞在することとなりました。

いまは城壁のほか何も残らない「洛陽漢魏故城」。夏はとうもろこし、冬は麦の畑中の道を歩きながら、倭国からの遣い人を思い、邪馬台国からの難升米や都市牛利（どう読むのか）を偲び、王城跡から漠として東方に思いを馳せたとき、「東京」は奈良や京都に対応する東都であるとともに、当然あっていい現代の「東アジアの大都市東京」として多重化して意識されたのでした。かつて若い日に奈良や飛鳥の地をたずねて畑中の道を歩きながら東方をみたとき、日本の歴史と東京の役割が納得されたように、現代アジアでの日本のなすべき役割が発見できるような予感がありました。

#### \*洛陽で得たふたつの自己目標

五五歳で、そのころめずらしかった「早期自主退社」をしてまで、しかも欧米の都市ではなくなぜ「洛陽」に？

長く「平和」でありつづけた時代が「長寿」として与えてくれるその後の人生になすべき課題とかかわってはいましたが、三年の滞在を終えて「洛邑土中」の地から帰国したあとも、なぜ？と問われてなお漠とした答えしかありませんでした。「平和裏」にこの国で暮らす国民（市民・人民）としてなすべき役割ということだけは確かでしたが。

そして世紀末に還暦とともに一九九九年の「国際高齢者年」を迎えたことで、この国に綺羅星のように輝く人びとともになすべき事業、平和の証である「日本高齢社会」形成への参画がひとつ明らかになりました。それと同時にもうひとつ、平和裏での「アジア共生への貢献」（先行国日本の「アジア化」によるアジア途上諸国の「日本化」）。

「日本長寿社会（高齢社会）」の達成と「アジアの共生（ものの豊かさ）」。

このふたつの事業は国際的にも注目されるわが国の役割であり、「平和裏」になすべきその事業に体现者のひとりとして力を尽くして参画するというのが、世紀を越えて一〇年余をへて、わたしの確とした信念となっています。先達のご努力でどちらも具体的に明確になりつつありますが、どちらも後人の厚い支持をえて、誇るべき時代の成果としての姿はまだみえてはいません。（『頑張って生きよう！』同輩』 高連協編 二〇一二年一月二〇日・博文館新社より）

## 赤い兎の目と戦争の記憶

### 灯火管制の下で

昭和一三（一九三八）年の暮れ近くに東京の渋谷区で生まれました。

子どもの目に焼きついた戦争の鮮明な光景があります。その夜、灯火管制でうす暗い家の中が急にざわめいて、大人たちみんなが二階に上がり、物干しや道路側の雨戸を細くあけて夜空

を見上げました。わたしも雨戸の隙間からおそるおそる夜空を見上げました。何本かの探照灯に照らし出されたB29。迫っていく日本の戦闘機。高射砲弾の煙と音。子どもの目でそれぞれ距離感の測りようもありませんでしたが、B29はゆうゆうと上空を横切っていききました。

### 父と母の挫折

それからまもなく、母と子どもたち（わたしと妹）は父方の実家がある群馬県の農村に疎開することになりました。父は農家の次男坊で、東京へ出て小さな工場を経営していました。母は勝気な江戸娘で、銀座のデパートづとめをしていたころ、有名な女優さんが買い物をする場面に出演したことが自慢で、何度も繰り返し聞かされました。少年のわたしは両親の持ち味の違いに戸惑いましたが、無口で実直な父のほうに味方しました。父の実家近くで借家暮らしをはじめてほどなく、東京大空襲で父の工場は焼失し職人たちは散っていききました。東京での父の労苦は跡かたもなくなり、都会育ちの母は暮らしの基盤を失いました。

### 疎開先での暮らし

榛名おろしの空っ風、八幡さまの杜と杉の並木、信越線の細く長い線路、野外映画会を見た校庭、墨を塗った教科書、すぐ破れてしまった運動靴、春風と疾風のようなふたりの女先生、ドドメ（桑の実）、モモの摘果、ウメのひこばえ、道祖神の火、「鐘の鳴る丘」、草を食む兎、ぶつちめのスズメ、流し針のウナギ、田んぼのヒル・・・。

戦争を避けて父の実家がある農村で過ごした日々。わたしは本家のいとこたちや学校の仲間

とすぐに馴染んで暮らすことができませんでした。しかし自分には見えない都会少年のシッポを付けていたにちがいありません。将来のためといって母が着せた“衣装”です。小学校に入ったときが終戦の年で、終戦の日は学校に呼び出されて、校長や先生方からいろいろな話を聞かされて、わけがわからないままひたすら明るい気分になって家まで走ってかえったことを覚えていません。

### 赤い兎の目の記憶

ある日、家の壁に寄り添って小さな兎小屋ができました。妹が求めたものだったのでしようが、摘んできた草の束を扉を開いて放ると、奥から兎が跳んで出てくる。赤い目でじっとこちらを見つめてから草を食べました。そのようすをこちらもじっと見つめました。危険を察知する大きな耳と跳んで逃げる後ろ足。戦うべき機能をもたない兎。ぴくぴく動く鼻とじっと見つめる赤い目が記憶に残りました。ある日、草の束をもって小屋にいくと、もうそこに兎はいませんでした。死んだのか逃げたのか他の動物に襲われたのかはわかりませんが、そのまますぐに忘れられました。にもかかわらず、その姿がその後いくどとなくよみがえります。

### 「ふるさと」の喪失

小学五年生の一学期の途中で、わたしはみんなと別れて東京に戻ることになりました。母の意向だったのでしようが、将来の不安は胸のなかに渦巻いていました。担任のK先生は親しかった何人かの仲間といっしょに信越線の踏切まで見送ってくれました。線路を渡ってひとりに

なつたわたしは、振り返ることもなしに八幡さまの杜に向かつて走りました。背中に感じたK先生の視線と親しかった仲間との「別れの感覚」はいまも忘れられない「ふるさと」喪失の記憶です。

### 「雪中高士」のように

その後借りていた家は朽ちましたが、わたしが植えたウメのひこばえは老樹のたたずまいをして立っていると聞きました。わたしもあれから六〇年余を都会で過ごして、いま此処に立っています。願わくば親木がそうであったように、冬の野に「雪中高士」として立ち、幾輪かの香りのいい花をつけてほしいものです。(『続 頑張って生きよう! ご同輩』高連協編 二〇一四年四月八日・博文館新社より)

### 堀 亜起良

一九三八年(昭和十三年)

東京生まれ

東洋哲学者

## 堀内正範

一九三八年、東京生まれ。早稲田大学文学部卒業後、朝日新聞社に入社。『知恵蔵』編集長などを務める。一九九四年に早期退社して中国中原の古都洛陽市へ。洛陽外国語学院外籍專家を経て同学院日本学研究中心研究員。洛陽国際龍門石窟研究保護学会本部顧問。

日中文化交流（文温の絆）・アジアの共生（豊さの共有）と日本高齢社会（三世代平等型社会）がテーマ。

著書に、『洛陽発「中原歴史文物」案内』（新評論）、『中国名言紀行 中原の大地と人語』（文春新書）、『人生を豊かにする四字熟語』（ランダムハウス講談社）

『日本型高齢社会 平和団塊が国難を救う』（TRH・J）などがある。



